



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター  
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 日本近代文学と口絵・挿絵の有機的关系に関する研究

研究課題(英文): A Study on the relationship between modern Japanese literary works and frontispieces or illustrations

申請者名・所属先: 出口智之 ・ 総合文化研究科

海外招聘者名: なし

## 1. 研究の目的

江戸期には一般的だった、本文の作者が口絵・挿絵の下絵(指示画)まで描き、絵師はそれに従って描きなおすという制作慣習が、近代に入っても続いていたという事実を基点として、明治文学と絵の関連の実相を具体的に明らかにする。

## 2. 研究開始当初の背景

上記のような事実は、明治文学に知悉した学者の間でこそ知られていたが、けっして一般に周知とはいえず、このことの持つ意味にいたってはまったく看過されてきた。だが、申請者出口が継続してきた調査によって、明治の作家たちも多くの口絵や挿絵に指示を出し、時には絵と本文との協働関係を活用して様々な効果をあげようとしていたことが明らかになった。これはすなわち、明治文学を本文のみで捉えるのは適当でなく、絵とともに検討する必要があるという、研究上の大きな地殻変動を促すものである。と同時に、従来の美術史研究から取りこぼされてきた口絵・挿絵に光をあて、近代日本における美術文化の一端を明らかにする試みでもあり、さらには出版史・書誌学や、作家と画人の権利関係の処理といった法制史にまで広がってゆく可能性も有している。

しかしながら、この領域はまったく新しい角度に立つため、先行研究の蓄積がほとんどなく、申請者がほぼ独力で調査している状況である。これまで、尾崎紅葉・樋口一葉・饗庭篁村・中里介山といった作家、武内桂舟・中江玉桂・梶田半古・石井鶴三といった画人、『文芸倶楽部』『新小説』『読売新聞』といったメディアなどについて研究を進めてきたが、いまだ調査のおよばない資料も多く、本研究課題を企図したものである。

## 3. 研究の方法

本研究は、おもに調査継続中の『読売新聞』と新対象である雑誌『都の花』に焦点をあて、その網羅的な調査によって検討すべき作例を抽出し、さらなる研究の進展をはかる。申請者が従来行ってきた方法的蓄積にのっとり、メディアや作家を軸として、個々の文学作品と口絵・挿絵の関わりを再検討する。

## 4. 研究成果

まず、当初予定してきた雑誌『都の花』については、全 109 号に掲載されたすべての小説および挿絵の調査を終え、すでに「挿絵から見る『都の花』の問題—草創期の絵入り文芸誌として—」と題する論文にまとめ終えている。この論文は、2023 年 1 月刊行予定の雑誌に発表されるはずのところ、雑誌編集上の都合によって上梓が遅れているものの、遠くない時期に発表にいたる見込みである。

一方、『読売新聞』についても継続的に調査を進め、現在は明治 28 年 7-8 月の斎藤緑雨「門三味線」(挿絵



無署名)以降、明治 35 年 7-9 月の足立北鷗・徳田秋声「士官の娘」(梶田半古画)までの全絵入小説の調査を完了している。しかし、新聞連載小説は挿絵の数が圧倒的に多いうえ、少なくとも明治 41 年 4-8 月の田山花袋「生」(鍋木清方画)あたりまでは調査が必要であることが判明し、また後述の事情もあって、研究期間内に調査を完遂することができなかった。この成果は、研究機関終了後の調査も加え、2023 年 8 月の研究会および同年 11 月の講座で発表予定であり、その後論文化することを見込んでいる。

対して、日本文学協会からの依頼により、「近代文学研究は近代「文学」研究で十分か？—樋口一葉「十三夜」から考える画文学の試み—」を『日本文学』2022 年 4 月号に掲載した。これは、2021 年 11 月 28 日に東京学芸大学で行われた同会のシンポジウム、「文学研究の方法の再検証—樋口一葉「十三夜」をよむ—」での講演を活字化したもので、申請者が過年発表した「一葉小説の口絵と挿絵—作者一葉との関わりから—」(『論集樋口一葉』5、2017 年 3 月)を受け、その後の研究成果を増補したうえで、「十三夜」における本文と挿絵(中江玉桂画)をめぐる動的な力学を解明した。

また、2022 年 1 月 8 日 - 2022 年 2 月 26 日に日本近代文学館で行われた「明治文学の彩り—口絵・挿絵の世界」展を監修した。これは、研究内容を学術論文の形ではなく、一般の文学愛好者にも届けるべく行った展覧会であり、新型コロナウイルスの蔓延により移動が制限され、また会期中に 1 週間程度の休館を挟みながら、1000 名を超える来場者を得ることができた。その全体は、会期終了後に同題の書籍『明治文学の彩り—口絵・挿絵の世界』(日本近代文学館編・出口責任編集、春陽堂書店 2022 年 8 月)として、図録に準ずる形で書籍化している。本展の監修および本書の編集作業に、研究開始当初の想定を上回る時間・労力を有したため、上記『読売新聞』の調査が後ろ倒しになったわけだが、一般への訴求という点で大きな効果を有する展示・出版となり、本研究にとっては重要な成果であったと考えている。

なお、この書籍については本研究による助成を受けて英文翻訳が進行中であり、研究期間の終了後は日本近代文学館の主導で翻訳作業が続けられ、2023 年度中には英語版が刊行予定である。

## 5. 主な発表論文等

### 〔図書〕

『明治文学の彩り—口絵・挿絵の世界』(日本近代文学館編・出口智之責任編集、春陽堂書店 2022 年 8 月)

『文学研究の扉をひらく—基礎と発展』(石川巧・飯田祐子・小平麻衣子・金子明雄・日比嘉高共編、ひつじ書房、2023 年 2 月、うち出口の執筆した第 7 章「口絵・挿絵 もうひとつの〈本文〉—尾崎紅葉「多情多恨」が本研究課題と関連)

### 〔雑誌論文〕

「近代文学研究は近代「文学」研究で十分か？—樋口一葉「十三夜」から考える画文学の試み—」(『日本文学』2022 年 4 月)

「挿絵から見る『都の花』の問題—草創期の絵入り文芸誌として—」(近刊『アジア遊学』掲載予定)

### 〔学会発表〕

「近代文学研究は近代「文学」研究で十分か？—画文学の試み—」(日本文学協会第 76 回大会「文学研究の方法の再検証—樋口一葉「十三夜」をよむ—」2021 年 11 月 28 日、於東京学芸大学)

「初期鏡花における口絵と挿絵—第二期『新小説』掲載作品を中心に—」(第 75 回泉鏡花研究会大会、2022 年 7 月 30 日、オンライン開催)

### 〔その他〕



「絵とともにある明治文学」(エッセイ、『日本近代文学館』、2022年1月)

「明治文学の彩り 口絵・挿絵の世界」展」(展覧会監修、日本近代文学館 2022年1月8日-2022年2月26日)

「『裸蝴蝶』と口絵・挿絵の問題」(エッセイ、『別冊太陽』渡辺省亭 花鳥画の絢爛、2022年2月)

「幻影のなかの樋口一葉」(エッセイ、『別冊太陽』鍋木清方 市井に生きたまなざし、2022年4月)

「口絵・挿絵研究の今後に向けて—画文学という構想」(展望、『日本近代文学』、2022年11月)